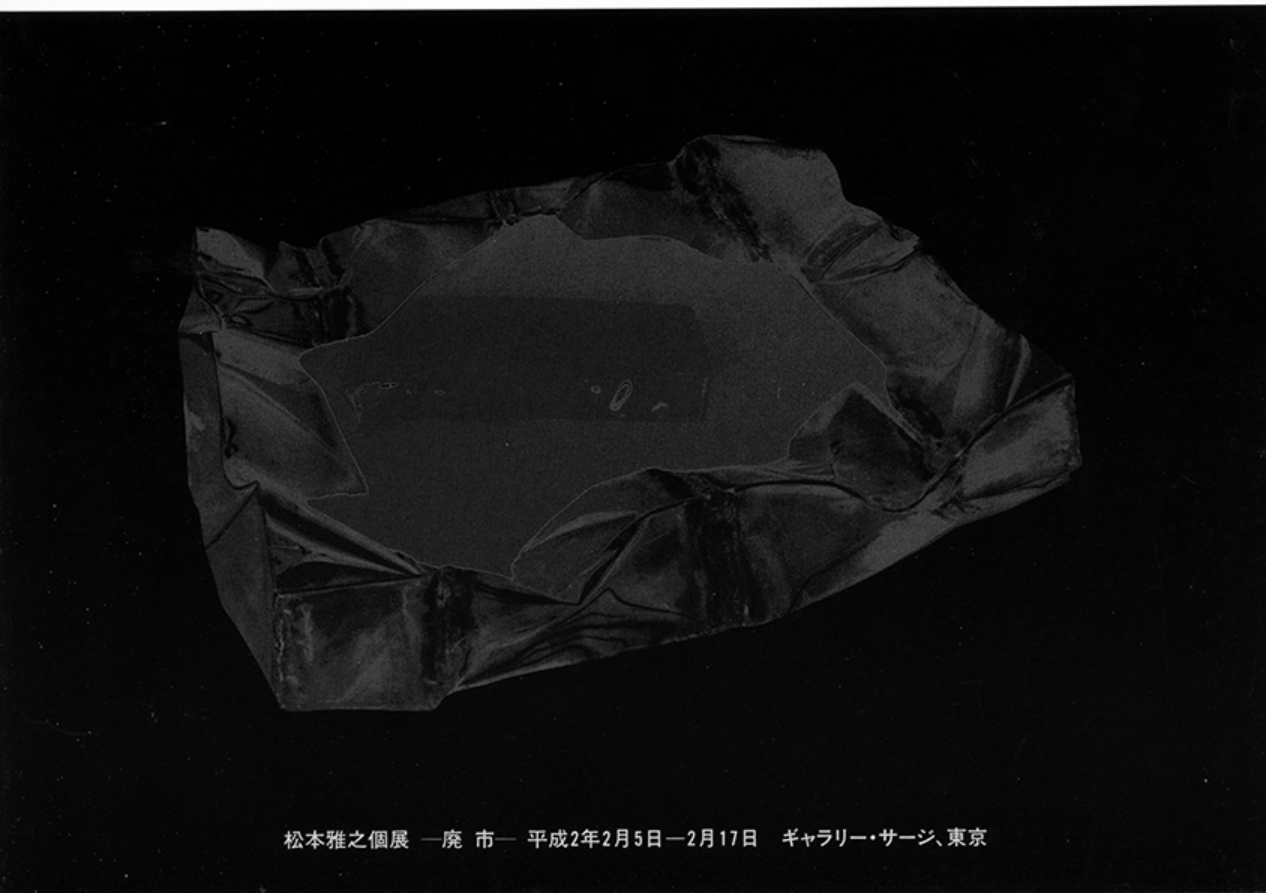
廃 市

Deserted City

Masayuki Matsumoto



松本雅之個展 —廃 市— 平成2年2月5日—2月17日　ギャラリー・サージ、東京

Title:Deserted City 1989
Material: brass, rejected oil Size:300×600×170cm
Place:Gallery Surge

Title:Deserted City 1989
Material:brass Size:350×400×120cm
Place:Gallery Lunami

世紀末の幸運

美術が、具体的な対象の再現や、イメージを実現化することに疑いを持ちはじめて、早くも一世紀が過ぎようとしている。

我々は、この様な枝葉の末端で、モノの存在の本質を模索しているのだが、未だ確かな手応えは無い。混沌の世紀末、まさに到来と言える。そんな中、私は、一つの糸口として、理論的関係性の網の目からこぼれ落ちてしまった何かが、気になって来た。モノの存在の本質は、主体と客体といった対象として有るのでは無く、主観的な関わりそのものの中にしか見出せないと気付いたからだ。かくして、行為とものの新しい関わりをもとめるため、真鍮の板材と私の格闘が始まった。

工業規格という、主観とは無縁の薄材を、二つ折り、二枚重ね等、物理的に立ち上がるための最小限の加工の後、合わせ目を溶接する。すると熱の歪みによってわずかに膨らんだ立体になる。この時、イメージや行為はほとんど無いが、やがてこの中性的な立体は、無造作に振り下ろす鉄パイプの衝撃によって、思わぬ量感を獲得し、美しく立ち上がる事となる。身体行為の一回性を定着された物体には、皮肉にも、内部と外部、表面と立体といった彫刻にまつわる様々な概念が、見え隠れし始める訳だ。

作業工程そのものに、モノが実体として存在することの本質を見る思いがするため、今回も又、身体的な関わりの工程をビデオで提示する。

それにしても、モノの存在を、主観的なモノとの関わりそのもの中でしか、確認できない不幸。その程度が、世紀末に生きる、我々世代の幸運と言えるのかも知れない。

松本雅之

略歴

1953　京都府生まれ
1976　多摩美術大学彫刻科卒業
1978　東京芸術大学院美術研究科彫刻専攻終了

〈個展〉

1977～82　楡の木画廊（東京、銀座）
1983　ギャラリー・アメリア（東京、青山）
1984～85　ギャラリーK（東京、銀座）
1986　ルナミ画廊（東京、銀座）
1987　ギャラリー射手座（京都）
　　秋山画廊（東京、日本橋）
1988　画廊パレルゴンII（東京、神田）
　　ギャラリー射手座（京都）
　　アート・ハウス（群馬、沼田）
1989　ルナミ画廊（東京、銀座）
　　ギャラリー・サージ（東京、神田）
1990　ギャラリー・サージ（東京、神田）

〈グループ展〉

1977　第13回現代日本美術展（東京都美術館・京都市美術館）
1980　第13回日本国際美術展（東京都美術館・京都市美術館）
1981　第15回現代日本美術展（東京都美術館・京都市美術館）
1982　第14回日本国際美術展（東京都美術館・京都市美術館）
1983　現代美術の新世代展（三重県立美術館）
1985　現代のユーモア（埼玉県立近代美術館）
1986　パドックII（エスパース　ポイント（パリ）
　　形式考—みえるものから—画廊パレルゴンII（東京、神田）
　　コンタクタ'88　ドイツ文化会館（東京、赤坂）
1987　ルナミ・セレクション　ルナミ画廊（東京、銀座）
　　現代のイコン（埼玉県立近代美術館）
　　—イメージ・トレーニング—　画廊パレルゴンII（東京、神
　　HANDY WORKS BY HANDS　ルナミ画廊（東京、銀座）
1989　今日の視線・空間　アートスペース砺波（富山、砺波）
　　第19回現代日本美術展（東京都美術館・京都市美術館・広島市美術館）
　　現代彫刻の新世代展（清瀬市立郷土博物館）
　　HANDY WORKS BY HANDS　ルナミ画廊（東京、銀座）

1953　Born in Kyoto
1976　Graduated from Tama Art University
1978　Completed postgraduate studies at Tokyo University of Fine Arts

〈One Man Exhibitions〉

1977～82　Gallery Nirenoki, Tokyo
1983　Gallery Amelia, Tokyo
1984～85　Gallery K, Tokyo
1986　Gallery Lunami, Tokyo
1987　Gallery Iteza, Tokyo
　　Gallery Akiyama, Tokyo
1988　Gallery Parergon II, Tokyo
　　Gallery Iteza, Tokyo
　　Gallery Art Haus, Gunma
1989　Gallery Lunami, Tokyo
　　Gallery Surge, Tokyo
1990　Gallery Surge, Tokyo

〈Group Exhibitions〉

1977　"The 13th Contemporary Art Exhibition of Japan", Tokyo Metropolitan Art Museum & Kyoto Municipal Art Museum
1980　"The 13th International Art Exhibition of Japan", Tokyo Metropolitan Art Museum & Kyoto Municipal Art Museum
1981　"The 15th Contemporary Art Exhibition of Japan", Tokyo Metropolitan Art Museum & Kyoto Municipal Art Museum
1982　"The 14th International Art Exhibition of Japan", Tokyo Metropolitan Art Museum & Kyoto Municipal Art Museum
1983　"Contemporary Art Exhibition of Young Generation", Mie Prefectural Museum of Art
1985　"Wit and Humor in Contemporary Art", The Museum of Modernart, Saitama
1986　"Padock-part2", Espace Point, Paris
　　"Consideration on From", Gallery Parergon II, Tokyo
　　"Kontakta '88", O. A. G-Haus, Tokyo
1987　"Lunami-Selection", Gallery Lunami, Tokyo
　　"Icon in Contemporary Art", The Museum of Modernart Saitama
1988　"-Image Training-", Gallery Parergon II, Tokyo
　　"Handy Works by Hands", Gallery Lunami
1989　"The 19th Contemporary Art Exhibition pf Japan", Tokyo Metropolitan Art Museum, Kyoto Municipal Art Museum & The Contemporary Art Museum of Hiroshima
　　"Contemporary Art Exhibition of Young Generation", Kiyose Municipal Museum
　　"Handy Works by Hands", Gallery Lunami

歪んだ卵が孵化するとき

私が松本雅之の彫刻と初めて出会ったのは、ドイツ文化会館で1986年に開かれたグループ展「コンタクタ'86」の会場だった。薄暗い室内に、押しつぶされた黄銅板の平たい箱が置かれ、その窪みには黒い廃液が溜まっていた。初め、その彫刻は、ひとつの出来事が終わり再び新たな始まりを願う苦しみを、私に投げかけた。しばらくすると、その形態には、手数を倹約し、自立した立体を夢みた60年代ミニマリズムへの拒否と思慕、その凹凸の表面には、描く行為の痕跡も生々しい40-50年代の抽象表現主義への憧れ、その廃液には、人間と物質の対話を促すアルテ・ポーヴェラからの引用が読み取られるにつれ、いくつかの美術史の文脈で武装した戦略家を背後に感じるようになったことをおぼえている。

'89年のルナミ画廊の個展で、彼の記述から次のような手順で彫刻を制作することを私は初めて知った。まず、肉厚0.8mm工業規模そのままの寸法の黄銅板に二つ折りか二枚重ねの加工を施す。次にエッジ部分をガス溶接する。この立体を、この日の気分のままに鉄パイプでブン殴る。さらにその表面に腐蝕液をかけて緑青をふかせ、凸部分の稜線を磨き込むという工程である。

大学で金工の技術を学んだ彼は、どんな対象でもたちどころに精巧にそっくりそのまま作り上げる技術を身につけている。にもかかわらずその技術のお披露目はお倉入りになっている。彼は、禁欲的な加工とエッジの溶接で最小限の形をつくる。このとき溶接時の熱による歪みによって、わずかに膨らんだ立体ができあがる。彼はこれを“彫刻の卵”と呼んでいるが、この卵の殻を「その日の気分のままに」打ち砕いていくのである。彼は殴打しながら永らく身につけた技術に別れを告げ、工芸的な技術を駆使する誘惑から逃れる。どこへ向かうのだろうか。過去に使った筋肉や神経組織にどんな命令を与えるのだろうか。私の記憶に戻ろう。松本雅之の彫刻は、単純な幾何学的な形に外厚による歪みをともなった稜線が強く浮かびあがり、さまざまな不定形な窪みを見せていた。そこには論理的な力と情念的な力がなおもある定位値、ある定住地を求めて移ろっており、黒い廃液がその漂泊を戒め、窪みに湛えられているように感じた。

再び彼の制作工程を探ってみよう。彼は、細工に適した黄銅板に禁欲的な加工を施し、自ら言う“彫刻の卵”に鉄パイプの打撃を加える。輝くばかりの表面を腐蝕するかとおもえばさらに磨きをかける。豊穣と抑制、誕生と破壊、変容と再生などの相矛盾した二極の往復運動に身を投じ、その闘いと迷いの中に自らの思考、感情、意志を宙づりにする。何が誰がその運動の停止を命ずるのだろうか。いやむしろその宙づりから彼の中に眠っていた分身が新生する瞬間を求めているのだ。

彼は、最小限の加工・溶接→“彫刻の卵”→殴打・腐蝕・研磨という制作工程を繰り返す。この繰り返しの行から次々と彫刻が生まれる。だが、この彫刻はまだ安住の地を志向している。その門前で裸をさらしている。この繰り返しの行が、制作という行為から日常の営みへと転じるとき、彼のからだから美術という物語がはげ落ちることだろう。優れた質をもつ彫刻は美術という王国とは無関係に輝いているものなのだから。

ふくやま美術館学芸員　　石井　太

廃市展によせて

常に検証作業を繰り返す現代美術。松本の十数年の活動も、もちろんそうした繰り返しでもある。しかし、今、彼を待ちうけていたものは美術が美術として隠蔽し続けて来た何かではないだろうか。

彼は、鉄パイプで黄銅板を打ちながら作品を作り上げる。それは、あくまでも行為の集積としての作品をめざしているのだが、その制作過程で立ち現れてくる美術としての現れを、近ごろは、楽しんでいると話してくれた。しかしそれは、彼自身を呪縛する不可能性の断片でしかないだろうし、まして彼のリアリティーになりかわることはないだろう。また、その瞬間、この美術としての現れは、彼の網膜を亡霊のように擦り抜けていくだろう。

松本は今、まなざしの奥に潜む澱みに対し、漂流を開始したように思える。もちろん彼にとって約束の地などであるはずもなく、やがて彼自身が目撃するものは、破られるべく約束の所在であろう。

ギャラリーサージ　プロデューサー　酒井信一

GALLERY SURGE

企画：ギャラリー・サージ 東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル2F 電話：03-861-2581

Publisher: Gallery Surge 2-7-13, Iwamoto-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101 Tel. (03)861 2581 Graphic Design: Shinichi Sakai Printing: Nakayama Toppan Insatsu, Tokyo
© 1990 Masayuki Matsumoto and Gallery Surge